

# 朝な夕なに



東方 project 二次創作(成年向け)  
perique/zealfahren 2021/12/31 C99

「明日、何か予定ある？」

夕食後。片付けを済ませて神社の茶の間で濃い茶をすすっていると、日めくりカレンダーを一枚めくりながら霊夢がつぶやいた。

「……どうした？ 藪から棒に」

「別に」

ちゃぶ台を挟んで僕のほうに向きなおると、ちぎった日めくりの紙を折り紙でも折るように弄びながら、霊夢は淡々と続けた。

「私、明日は何も予定がないから」

畳んだ紙の上で、指がもぞもぞと気ぜわしげに動いている。気のない風を装ってはいるが、時折ちらちらと視線がこちらの様子を窺うように泳いでいる。

「なによ」

「いや」

苦笑する僕に、霊夢はすねたように頬を膨らませてみせる。

「最近構ってやれてなかったかなって」

「……そんなじゃないわよ」

呆れたような口ぶりだったが、目尻がほんのりと和らいでいた。僕は明日の予定を思い返す。まったくのフリーというわけでもないが、細かいタスクを一つ二つ片付ければ、あとはのんびりと過ごせる。こっちの方から何か神社のほうでなにか男手のいる仕事がないか聞いてみるつもりだったが――

「なににやにやしてるのよ」

「僕が？」

「そう」

霊夢はちゃぶ台にしどけなく頬を預け、いぶかるように目を細めていた。

「だれか女の子と会う予定でもあった？」

「さあね、予定帳を見てもないとな」

「よく言うわ。……また口元が緩んでるわよ」

「そうか？」

今度は自分でもわかっていた。時間に追われるほど忙しくもなく、時間を持って余すほど暇でもない。食うにも住むにも困らない生活。そして、こうして、何かたいして意味のあることを話すでもなく穏やかに誰かと過ごす時間。外で暮らしていたころの月並みではないが人並な生活にさして不満があったわけでもないが、こうして霊夢と静かに過ごす日々とは、比べるまでもなかった。

「……いや、いい暮らしだなと思って」

「変よ、あなた」

「そうか？」

僕は首をすくめてみせると、当面の本筋に話題を戻した。

「森近さんのところで頼まれてるものがいくつかあって、明日片づけたら納品に行く予定だったが……あとは空いてるよ」

「そう」

霊夢は静かにうなづく。

「帰るの？」

「ああ。ご馳走様」

空になった湯呑を置いて腰を上げる僕を、霊夢はちゃぶ台に頬をもたれたまま視線だけで追っていた。

「少し部屋を片付けておかないとな」

その朝は柄にもなく、まだ外がほの暗いうちに目が覚めた。陽が短くなっているとはいえ、時計を見ればまだ六時にもなっていないかった。冷たい水で顔を洗いながら、遠足の日の子供のようだ、と自嘲する。寝乱れたベッドを整え、窓を開けて空気を入れる。空気は心地よく澄んでいるが、まだ山から下りてくるもやが晴れきらない朝はほのかに肌寒い。

ストーブの中で泥炭の塊に火を入れ、ついとばかりに朝の衣服に火をつける。ストーブの火が落ち着き、ポットの蓋がカタカタと揺れだすころには、窓から紫煙を切り取るように柔らかな朝の光が差し込んできた。

昨日の出がらしに湯を通した薄いコーヒードリ้งで体を温めていると、半分開けた窓の外からポーチの階段が軋むのが聞こえた。

「おはよう」

「…おはよう」

ドアを開けると、ノックしかけた手を所在なげに握ったままの霊夢が立っていた。

「この時間に起きてるとは思わなかったわ」

「僕もだ。どうも、今朝は目が覚めてしまったな……歳のせいかな」

「かもね」

平然と言つてのけると、霊夢は促すように肩をすくめてみせた。

「ああ、すまない。入ってくれ」

「……お邪魔します」

「邪魔なものか」

僕の軽口に答えずに霊夢は僕の横を通り抜けて部屋の中に入った。互いに勝手知ったる仲とではあるが、今朝の霊夢は心なしか肩に力が入っているように見えた。緊張している？ あるいは。

「ほっとしたわ、思ったほど散らかってなくて」

「おかげさまでね」

「ちょっと私が目を離すと散らかり放題でしょ？ あんた」

ベッドの傍らに立ち、ぐるりと室内を見回しながら整頓状況を講評する霊夢の背後から、細い肩に腕を回す。

「ちょっと」

「ん？」

「……まだ、朝よ？」

そう言いながら、抱き寄せる腕を払いのけようとはしなかった。

「んっ……」

おとがいを持ち上げるようにしながら、背後から口先ばかりの貞操を言の葉に乗せた唇に唇を重ねる。甘く柔らかな粘膜をしばし堪能し、やがてどちらからともなく自然に顔を離して視線を交わす。

「タバコくさい」

「悪いな」

いがらつばい煙草の後味を綺麗に押し流す甘い唾液の味を反芻しながら、僕はむき出しの肩を指の腹でなぞる。霊夢はくすぐったそうにしながら、腕の中で震えていた。

「寒いかな？」

「……？」

指先に触れた柔肌はかすかに震えていたが、ほんのりと熱を帯びていた。

「う……うん……うん……」

うつむきながら力なく否定する拍子に、丁寧にくしけずられた髪が揺れ、ほのかに石鹸の匂いが漂う。朝も早くから風呂を浴び、髪も装束も身ぎれいに整えてこ

ここまで歩いてきた霊夢の姿を想像すると、胸と臍下が同時にじんわりと熱くなる。

「ならなぜ服など着ている」

静かに、しかし明瞭に耳もとでささやく声に、霊夢はびくりと身をそばだてる。

「……俺がなにか誤解していたならすまないが」

力の入れ加減を間違えたら、何かの拍子に折れてしまいそうなたおやかな首筋に顔を埋めるようにしながら、僕は続ける。

「そういう予定じゃなかったのか？」

「ッ……」

霊夢はしばし無言のまま、背後から回される腕に手のひらを重ねていたが、やがて重たく口を開いた。

「……そうよ」

緊張と期待で汗ばんだ手のひらが、跡が付きそうなくらいに強く僕の前腕を握りしめる。

「そういうつもりだった。あなたに……ご主人様に飼われて、黽（むげ）られて、弄（もよ）ばれて、あなたにおちんちんをねじ込まれて、あなたの欲望を全部受け止めたかった」  
声を震わせてそれだけ言うと、霊夢はこれで満足か、と問いたげに背後の僕をねめつけていた。

「その辺の雌犬が聞いたら軽蔑するな」

「犬以下でも構わないわ」

目尻に涙が滲んでいた。美しい眺めだ、と思った。

「――あなたに飼われるなら」

タフで気丈で気高くて、そしてどうしようもなく淫乱。どうしようもなく素敵な女。そんな女を腕の中に抱いている、ぞくぞくするような征服欲と満足感。まともな人間としてはいけない、させてはいけないと躡（たづ）ねられた大事な何が僕の中で死んでいく。この男殺し。

心臓が早鐘のように打っているのを悟られる前に、僕はゆっくりと腕を離す。

「……自分で、脱ぐから……」

しなやかな指がするりと胸元のリボンを解く。そのまま霊夢は一枚、また一枚と装束を解いては、丁寧（ていねい）に折り目を正して畳み、ベッドの枕元に積み重ねていく。

「……」

髪の毛飾りとリボン以外のすべてを取り払うと、霊夢は膝をそろえてベッドのふちに腰かけたまま、じつと唇を噛んで僕のほうを見上げていた。

「尻を向ける」

「……はい」

静かにうなずき、霊夢は諸々と一糸まとわぬ裸体の向きを変えた。ベッドに上半身を持たせかけるようにして、白い双臀をこちらに突き出してみせる。

「ご覧に……なれますか？」

「ああ」

促すまでもなく、柔らかだが張りのある臀肉が霊夢自身の指で左右に押し開かれる。葛饅頭に一本切れ目を入れたようなしとやかな秘裂。そのほんの少し上でひくひくと期待を込めて震える肉蕾は、かすかに濡れたような生々しい光沢をたたえている。しとどに湿った淡い繊毛に縁どられ、じかに触れる外気のそら寒さに震えているように見えた。

「綺麗にしているな。いい眺めだ」

「ご主人様に……失礼があつては、いけませんから」

「ふむ」

努めて横柄にうなずくと、僕は屈みこんで押し広げられた尻の谷間に顔を近づける。すん、と鼻をならすと、汗ばんだ肌の甘やかでかすかに乳臭い香りにまじつて、丁子の香りがした。霊夢が時折使っている肌油の匂いだ。

「準備万端というわけか」

「う……」

指先で菊座の芯をなでてやると、しなやかなに伸縮する肉の輪がつぶりと指の腹を中ほどまで飲み込んでいく。

「……すぐにでも、使つて……いただきたい……」

目の前で尻の穴をまじまじと眺められ、匂いがかがれ、指でまさぐられても、霊夢は羞恥をこらえたままじつと手で尻たぶを押し広げていた。

「見上げた心がけだ」

その健気で淫猥な様に、むくむくと嗜虐の虫が僕の中で鎌首をもたげる。

「そのままにしていろ」

背後の作業機のほうに向きなおり、引き出しを開ける。目当ての物はすぐに見つかった。鈍い銀色の光沢を放つ金属のフックを手にとると、再び霊夢の尻の谷間に顔を寄せ、口の中にためた唾を吐きつける。

「んんっ……んあっ……」

唾液交じりの指で浅く肉蕾をなでてやると、霊夢は甘えた吐息を布団の隙間から漏らした。たおやかな柳腰が、指姦を受け入れ、自分のほうから誘うようにもぞもぞとにじり動いている。

「ひっ……っ？」

金属製フックの球状になった先端を肉蕾に押し当てた瞬間、霊夢は表情をこわばらせた。

「えっ……なにっ……」

「そのままにしている、と言ったぞ」

熱い肉槍の代わりに押し当てられた冷たい金属。肛門性交の期待に蕩けていた視線が、不安と疑念の色を帯びて背後を振り返る。それでも手だけは、言われたとおりに尻たぶに添えられていた。

「んんっ……！ つめ、たっ……あっ、ああっ」

指よりは太いが、僕のペニスよりは細い。熟れた菊穴は、抵抗することもかなわずフックの曲線部分までを飲み込んでいく。体の内側から熱を奪っていくアナナルフックの冷たさに身もだえする霊夢を抱え込むようにして、腰に革のベルトを巻き付けていく。

「どう……して……？」

尻穴にねじ込まれたフックを腰のベルトに固定すると、僕は一歩下がって霊夢の姿を満足いくまで眺めた。可憐でかわいらしい、張りのある尻から突き出した金属のフック。骨格の生育は果たしても肉の成熟が追いつかない、アンバランスな危なっかしさははらんだたおやかな腰に不釣り合いな革のベルト。倒錯的で冒瀆的な光景に、仄暗い征服欲が刺激される。

「俺が犬のカマを掘るような変態に見えるか？」

咎めるでもなく、責めるでもなく、霊夢は無言のまま顔を伏せて目尻に涙を浮かべていた。

「不満か？」

「……」

「不満なら、自分で外して今日はもう帰れ。カギはかかってない」

「いえ……」

重たげに霊夢は体を起こすと、ふるふるとかぶりを振った。

「……ご主人様の、お望みのままに」

「そうか」

華奢な肩が、普段にもまして小さく見える。ベッドの上で身を縮こまらせる彼女は、自己憐憫に浸っているように――あるいは、それによっているようにも見えた。

やりすぎだ、と言ってくれるのを心のどこかで待っていた。もっと優しく扱って、と言えれば、僕はそうするだろう。耳元で甘い睦言をささやきながら、彼女の望むどこにでも彼女が満足するまで精を注ぐだろう。でも、彼女は拒もうとしなかった。静かに笑っていた。

「犬なら犬らしく、舌を出せ」

「はい」

霊夢は膝の間に手をついて座りなおすと、僕のほうに顔を向けた。

「もつとだ」

「はひ」

赤く濡れた舌を無造作に指でつまむ。目を閉じ、おとがいを持ち上げるようにして舌を差し出す霊夢の鼻先で、僕はズボンの前を開けた。目と閉じていてもそれとわかる匂いにペニスの存在を感じたのか、霊夢はわずかに眉を動かしたが、黙ったまま舌を差し出していった。

「こぼすなよ。シーツを汚したくない」

最前から股間は痛いくらいに張り詰めている。睾丸のほうに切り替わった流路を無理やり押し通すようにして腹に力を籠める。何を飲まされるか察したうえで、霊夢はペニスを迎えるように舌を伸ばし、亀頭を口に含んだ。

「んっ……」

暖かく、柔らかく亀頭を包み込んでくる口腔粘膜の中で放尿するのは、射精とはまた違った弛緩するような快感があった。体温と同じ温度の風呂に浸かっていて、暖かさも寒さも感じずに、溶けていくような感触。霊夢の白い喉首がこくん、こくんと規則正しく上下し、小水を胃の中に飲み下していく。

「んっ……んむっ……」

口の中に放たれた小水のすべてを飲み下すと、霊夢は口づけるように眼前のペニスを唇で吸い、尿道の中に残った最後の一滴までを飲み干した。

「…けぶ」

咳ともげつぶともつかない、かわいらしい吐息を喉奥から漏らすと、霊夢はようやく目を開けて僕のほうを見た。

「……コーヒークさい」

「鼻が利くな」

「犬だもの」

口元をぬぐった指を、赤い舌がちろりと舐めた。

「当たり前でしょ」

くっくっ、と、僕はくぐもった笑みを漏らす。

「……いつまで裸でいる気だ？ 服を着ろ。風邪をひくぞ」

これで互いにルールが飲み込めた……と思う。